

2023_0824「列積乱雲（写真）」日々の理科 3304号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

積雲が上空に向かって（引力に逆らって）発達したものが「雄大積雲」（入道雲）です。雄大積雲も大きなものでは、激しい雨や雷雨をもたらします。更に、雄大積雲がいくつも連なって発達した状態を「列雄大積雲」といいます。

雄大積雲が更に上空に発達し、ついに圏界面（対流圏と成層圏の境界面）まで発達し、雲頂が水平方向に成長した状態を「積乱雲」（雷雲）と呼びます。広い地域で大気の状態が不安定になると、いくつもの積乱雲が並んで発達することがあります。これを「列積乱雲」といいます。この状態が長時間続くと、いわゆる「線状降水帯」（※注）が発生することもあります。

先日、関越自動車道を北に向かって走っている時に、その「列積乱雲」を見ました。実際に積乱雲が存在していたのは前橋市付近だったのですが、すでに練馬からも見えていました。目視では4塊の積乱雲が観察できました。

（※注）「線状降水帯」の語は気象庁が提唱し、NHK他のメディアも多用しています。しかし、そもそもこれは日本語として誤っています。降水「帯」が「線」状になることはあり得ないからです。「降水帯」の語は誤りではないので、「連続降水帯」または「長時間降水帯」と呼ぶのが正しいと思います。

（2023年8月下旬／関越自動車道・花園IC付近）

